

「競争力の源泉」の涵養と育成

加藤 義章*

Cultivating and Nourishing the Core Competence

Yoshiaki KATO*

研究の醍醐味は、今まで誰も経験したことがない新しい現象を、初めて作ったり、見たり、明らかにできることであろう。これを実現する「瞬間」を追い求めて、研究者は日々努力をしているといっても過言ではない。幸い光量子科学研究センターの研究も軌道に乗りはじめ、この「至福の時」を味わう機会も多くなってきた。研究者は多くの場合、努力してようやく実現した「新発見」の重要性について自分では高く評価しているが、その発展性についてまで明確な展望をもっているわけではない。しかし時を経て、この研究結果が広い普遍性を有していると多くの人に認識され、社会的に高く評価されるようになると、その時点でこの研究は変身する。それは高い価値を有する「資産」となり、競争的環境において力を発揮する「競争力の源泉」(Core Competence)となる。あるいは、必ずしも多くの人に広く認識されていなくても、それなしでは他の研究の発展が望めないような質の高い基盤的研究も、「競争力の源泉」となり得る。

この「競争力の源泉」は、それぞれの研究者が独自性を主張した結果として得られる、極めて個性的なものである。各研究者・研究組織はそれぞれ独自の「競争力の源泉」を形成し、それを大切に扱い、さらに大きく伸ばすことが重要である。このような「競争力の源泉」は短期間に形成されるものではなく、研究者、研究組織が長年にわたり努力を積み重ねて初めて、世界的にも高く評価される太い柱となる。「競争力の源泉」は社会全体としての貴重な資産でもあり、質の高い資産を多数保有することが、世界に伍していく原動力となる。

さて今日、日本は産官学を挙げて構造改革のまっただ中にある。大学では法人化、「21世紀COEプログラム」などで多くの教官が対応に追われており、日本原子力研究所も核燃料サイクル開発機構と統合して平成17年度から新独立行政法人として出発する予定である。いつの時代でもそうではあるが、特にこのような変革期に伴う競争的環境にあつて、研究者あるいは研究組織が依って立つ基盤は、それぞれの力の源となる「競争力の源泉」であろう。これを基盤として計画を構築し展開することにより、研究者・研究組織の独自性が発揮され、且つ全体として多様性に富んだ研究が展開されることになる。

最近、「重点4分野」の制定、産業への貢献などが強調され、研究費、研究活動の流れが大きくシフトしつつある。これはこれで時代の要請に沿ったものであり、研究者は柔軟性を発揮し、時代の流れに対応するべきであろう。しかし懸念されるのは、短期的な課題に多くの研究者が携わることにより、共通の基盤となる基礎的研究が失われかねないことである。例えば、流体力学や原子物理学などは、直接的には産業には結びつかないが、これら基盤となる学問に従事する研究者や研究組織が次第に消滅するとしたら、重点分野の発展にも支障となろう。

研究機関がノーベル賞受賞者を産み出すまでに、その設立から30年程度かかるとの経験則があるそうである。重要な研究を育成するには長い期間が必要であることを示しており、我々はしっかりした研究組織を作り、それを育て、継続的に発展させていくことが必要である。短期的視点で重要なテーマを変更したり、組織を大きく変えることは、結局研究を分断し、貴重な資産を失うことになる。構造改革の時代にあつても、各研究者・研究組織が基本を重んじ、それぞれが依拠する「競争力の源泉」を互いに尊重し、育成する必要がある。

奈良の近くに住んでいると、古墳、古寺、仏像などと接する機会も多く、昔の文化・生活が身近に感じられる。今日に伝えられている歴史的遺跡・遺物は、遷都による荒廃、戦乱による破壊(源平の戦い、応仁の乱、戦国時代)、あるいは意図的な破壊(明治初期の排仏毀積)など、多くの難局を経て奇跡的に残されたものである。これらの保護・再建に尽力した人や、この間に失われた多くの遺産を考えると、改めてその貴重さに思いが至る。これらの遺産が今日まで生き残ったのは、偶然だけでなく、人の敬意を集め難局を乗り越える力を有していたからとも考えられる。我々も、しっかりした研究を涵養、育成し、長期的評価に耐える成果を産み出したいものである。

* 日本原子力研究所関西研究所(〒619-0215 京都府相楽郡木津町梅美台8-1)

* Kansai Research Establishment, Japan Atomic Energy Research Institute, 8-1 Umemidai, Kizu, Souraku, Kyoto 619-0215